

神の国の奥義

(マルコ4・10〜20)

一、「奥義」をめぐる

「奥義」は、キリスト教会用語です。このことばは、「元々「おくぎ」と読みません。辞書で引くと「おつき」になっています。教会が「奥義(おくぎ)」ということばを使うようになったのは、いつ頃からなのでしょう。11節の文語訳は次のとおりです。ヘイエス言ひ給ふ『なんぢらには神の國の奥義(おくぎ)を與ふれど、外の者には凡て譬にて教ふ。』「奥義」に「おくぎ」とルビが振られています。なぜ「おくぎ」にしたのでしょうか。私が考えますに、「おつき」としてしまつと、日本語の古い概念に縛られてしまつからです。同じことは、「元のことば「ミユステーリオン」についても言えます。ギリシア語にはギリシアの長い歴史と文化が関係していますから、あまり言語の意味を掘り下げて受け取っても、意味はないと思います。やはり、キリスト教会が「ミユステーリオン」ということばを用いて、何を受け取ったのかが大切です。

主が語られたたとえは、種を蒔く人のたとえでした。主がそのたとえを通して何を語らんとされたのか、弟子たちには分からなかつたので、へきて、イエスだけになったとき、イエスの周り

にいた人たちが、十二人とともに、これらのたとえのことを尋ねた。とあります(10節)。すると主は答えられました。11節です。へきて、イエスは言われた。『あなたがたには神の國の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。』と。神の國の奥義を知るのが許されているのはヘイエスの周りにいた人たちと弟子たちだけでした。

二、主イエスが語られた奥義

主イエスは、どのような奥義を語られたのでしょうか。14節です。へ種蒔く人は、みことばを蒔くのです。と語られました。主が語られたへ種はへみことばである、とおっしゃいました。へみことばと訳された元のことばは「ロゴス」の単数形で、「キリストの福音」を指しています。主イエス・キリストを信じるなら救われるというメッセージです。当然のこと、「みことば」、すなわち「キリストの福音」には、十字架と復活昇天と神の右の座への着座というメッセージまで含まれています。ですが、主イエスがこのたとえを語られた時、まだ十字架にかかっておられませんし、その前にご自身が多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならぬことを語っておられませんでした。

この箇所はどのように解釈したら良いのでしょうか。こういうことかと思えます。たしかに主イエスはたとえの解き明かしを、イエスの周りにいた人たちに、また弟子たちに語られました。ですが、理解できませんでした。彼らがその意味を知るようになったのは、主イエスが十字架にかかり、復活させられ、父の右に座し、聖霊が降り、教会が誕生してからです。しかも、教会が誕生してから三十年、四十年というスパンの中で分かったものと思われまふ。と言いますのは15節から20節に書かれている、主イエスが語られた解き明かしは、年数が経たなければ分からない内容だからです。

15節をご覧ください。へ道端に蒔かれたものとは、こつうう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くとすぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります。とあります。ちなみに、こちらのへみことばも単数形で、「キリストの福音」を意味しています。教会を通して、伝道がなされました。ですが、「みことば」、すなわち「キリストの福音」に全く耳を傾けない人々が居ました。当時も今も同じです。問題は16節、17節です。へ岩地に蒔かれたものとは、こつうう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことば

のために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。とあります。信じて、教会生活、信仰生活から離れて行ってしまう人たちが、当時もいたということばです。

18節、19節のようなケースもありました。へもう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こつうう人たちのことばです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。とあります。せかっく主イエス・キリストを信じて教会生活につながたのに、この世の誘惑に負けて、バックスライドしてしまう人たちです。

そして、20節です。へ良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことばです。とあります。キリストを信じ、困難や迫害に耐え、教会生活、信仰生活を全うする人たちです。信じたにもかかわらず、このような違いが起きるのは、なぜなのでしょう。か。

教会が、主イエス・キリストと聖霊から教えられた奥義は、みことば、すなわちキリストの福音を受け入れ、福音に養われることである、これしかないと言つことばです。ですから、種を蒔く人のたとえから来る解き明かしの意味は、教会にとって、とても、とても大切な奥義であると知ります。